東海書道藝術院
会報 東藝塾
第一三九号
令和元年 12 月
http://www.toshogei.jp/

'19 東海書道藝術院研修会

鳥羽市 戸田屋

令和元年九月八日・九日、東書藝夏期一泊研修会が鳥羽市・戸田屋で開催された。近づいて来る台風の予想進路が三重県とたいへん心配したが、この地方にとっては幸いにもそれ、暑い晴天の両日となった。

この会場は何年か振りで懐かしい感じがする。快適な研修環境は会場選択や当日早い時間からの準備作業等、研修局・役員の先生方の尽力のお蔭である事を感謝したい。

午後一時受付開始。一時四十分より会長・風岡五城先生講話「落款の書き方」がスタート。開会の言葉も交えて作品制作に

風岡五城先生席書

必須の知識を教授下さった。続いて愛知学院大学准教授・劉作勝先生講話、「中国法書中に見る避諱について」。劉先生のお話しは平成二十八年以来二度目で、増々流暢な日本語での講義に中国文化の実に奥深い面を学ぶことができた。（両先生の講話要約を次項より掲載します）

伊藤春魁先生席書

休憩をはさみ、「二〇二〇のカレンダーに文字を書こう！」と題し、全員が各々書きたい文字・言葉を彩墨で実際のカレンダーに書く席が設けられた。皆とても楽しそうで、昨年・今年の参加型企画は、出席者の充実感も高く好評のようだ。

久野北崖先生挨拶

熱気の冷めやらぬ中、久野北崖副会長の言葉で閉会となった。

夕刻の懇親会前には役員会。六十六回展の反省、今後の事業予定等が議論された。

お待ちかねの懇親会は木村大澤理事長の乾杯で始まり、各社中、和気藹々で大いに親交が深まった様子。

翌朝美味しい朝食を頂いて解散となった。

講演 1

「落款について」

会長　風岡五城

落款とは「落成款識（らくせいかんし）」の略。落成は物事ができあがること、書画の成ることをいう。また款識とはもともと青銅器に刻した文字のこと（款は陰刻の銘、識は陽刻の銘）である。

日本では一般的に号や、姓名のうち名のみを書くが、仮名や少字数の作品の場合は印だけのこともある。中国の場合は姓名を書くことも多い。字と姓名「子貞・何紹基」、号と名「果亭山人・瑞圖」などのパターンもある。また号に加える語として「散人（のんきな人）」「迂人（世事にうとい人）」「野人」「田翁」「学人」「道人」などの謙称がある。作品構成上、余白との兼ね合いで加えることもある。

作品を書いた年月日を記すのは記念、記録の意味がある。元号や年月日、十干十二支、時間を表す語「清晨、清昼、清夜」、日付を表す語「朔（＝一日）、望（＝十五日）、望後三日（＝十八日）」などを用いると雅味が加わる。西暦で書く場合は「公元二零十九年」とする。また「澣（＝旬）」は十日間のことをいい「上澣」等と使う。書道の世界ではこのような日常では使わない雅味のある字や語を用いたい。

雅号の他に、書いた場所を記すことがある。自分の家には「〇〇庵」「〇〇軒」、部屋には「〇〇斎」などを用いる。（例　游目斎…神谷葵水先生、望城庵…宏城先生、研田草廬…風岡五城）また、於（＝于）を使って場所を記す。「於〇〇庵北窓下東海書〈※東海は仮の名前、以下同〉」「于〇〇斎青燈下東海書」という書き方をする。東窓は正月などに合う、北窓は夏には涼しげな印象となる。旅先の地名などを書き付けるとよい記念となる。

何を書いたかを表す時は、「録蘇東坡詩東海」「蘇東坡詩東海書」などとし、「録」と「書」を重ねて書くことはしない。

また、「李太白秋浦歌之一東海書（李白の秋浦の歌のうち一つを東海が書いた）」「菜根譚之語二節東海書（菜根譚の語の二節を東海が書いた）」などと書く。

どのように書いたかを記す言葉としては、「漫録一首（漫に一首を録す…きままに一首を選んで書いた）」「弄禿筆（禿筆を弄す…擦り切れた筆で書いた）」「戯墨於南京客舎（戯れに南京の客舎において墨した）」「力疾（りきしつ…病気をおして書いた）」「酔後戯作」「倣顔魯公之書（顔真卿の書に倣って書いた）」「擬米芾筆意（米芾の筆意に擬す）」などがある。

年齢を記す場合は「時年七十有一」「八十老人」「八十五叟（＝老）」などとする。

為書には「為〇〇先生」「〇〇先生属書（〇〇先生の求めに応じて書いた）」という書き方がある。相手の名前は必ず上に書く。

以上のような内容を組み合わせながら落款を作成するとよい。ただし仮名作品の場合はあまり長い落款を書かず、書いても出典程度に留めることが多い。また、印の押し方も重要で本文の雰囲気に合わせる工夫も必要である。二顆押す場合は白文（姓名印）、朱文（雅号印）の順が日本ではきまりとなっている。一つしか押さない場合は白文、朱文のどちらでもよい。

古人の落款も参考にしながら、作品の雰囲気がよくなるよう工夫したい。

講演 2

「中国法書中に見る避諱について」

愛知学院大学准教授　劉　作勝　先生

皆さんこんにちは。今日の私の話ですが、**避諱**についての話です。皆さんが古典の臨書をする中で、時には法帖等に目を通すこともあるかと思います。その時に、何かあやしいな、何故こういう書き方をするのかなと思う事があるかもしれません。その中には、もしかしたら中国の避諱という文化に関わる事があるのではないかと思います。今日、私は調べたものをこの時間を使って皆さんと一緒に見てみたいと思います。

まず避諱について簡単に説明させていただきます。避諱とは、目上の者の**諱**（いみな）を用いる事を忌避する事です。具体的に言うと、尊者の名字（姓以下の称呼）を話すとき、または書くときに避けなければなりません。避諱についての最古の記録は、孔子の『記史』の中に見られます。そこには三種類の諱について記されています。一つ目は**尊者の為の諱**、次に**親者の諱**、三つ目は**賢者の諱**です。尊者とはその時代の君主・皇帝です。親者とは親です。では、尊者、親者に対する避諱は何代前まで遡る必要があるのでしょうか？皇帝、上皇、太上皇、また、父、祖父、曾祖父…永遠に諱について注意しないといけないのでしょうか？実は、中国では五代前までよいのです。遡る場合は、それ以上前のものについては大丈夫という事です。賢者というのは、尊敬する人のことを指します。後述しますが、儒教を重視する時代では、孔子の名前を直接言うことは禁じられていたのです。

「避諱」という言葉には二つの意味があります。一つ目は、**敬諱**＝尊敬する、という意味で、その為に諱を避けること。二つ目は**悪諱**。これは死んだ人に対する避諱です。亡くなった人を嫌う、というわけではありませんが、やはり別世界に行くので、早く人間世界との縁を切ってほしいわけです。日本の場合、亡くなることを俗に成仏と言います。中国では生きている時は人間ですが、亡くなると最初は鬼になると考えられています（生事畢（おわ）り而鬼事始《禮記》）。死者の国の王である閻魔の判断で、生前によい行いをした人は天界に、悪い行いをした人は十八層下の地獄に落とされます。一般的には、亡くなった人の名前を避けた方がいいと考えられています。故に、墓碑では、死者の名前を書くとき、皆、「諱」を付けます。例えば『曹全碑』の開頭には「君諱全字 」とあり、『高貞碑』にも「君諱貞字 」という記述が見られます。また、墓誌銘など、死者の名前を言うときにも、やはり「諱」の字を付けます。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、古典書作の中の「鬼」の字はツノの部分を書かない事が多いのです。中国では一説として、「鬼」のツノは書かない方がいいと言われています。鬼にならない為、つまり、ツノを切ってしまえば、神様に帰依したことになる、というのです。鬼の一画目を書かないのは悪諱によるものだという説もあります。

尊諱の例として、唐代の有名な詩人、杜甫の母親の名前を挙げることができます。彼女の名は、花の名をとって「海棠」といいます。杜甫は生涯三千余の詩を書きましたが、一度も「海棠」の詩は書いた事がありません。それから、父の名は杜閑といいますが、やはり、杜甫の詩の中に「閑」の字は出てきません。閑の字は古詩の中ではよく使われる字なのです。しかし、杜甫は使いませんでした。宋代の詩人、蘇軾についても例があります。蘇軾の祖父の名は蘇序です。彼は生涯、「序」の字を書かなかったと言われます。では、序文を頼まれたらどうするのか。その時は、代わりに「叙」の字を使ったそうです。良く臨書される作品の一つ「蘭亭序」は、「序」の字を書く事が多いですが、実は「蘭亭叙」という書き方もあるのです。これは宋代以降に変わり、蘇軾の祖父の諱を避けた為にこのようになったという説があります。

避諱は、主に三つに分けられます。

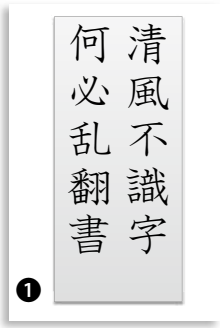
孔子が言われた三つの避諱（尊者、親者、賢者）の後には、**国諱**（主に歴代の皇帝）、**家諱**（私諱ともいう）、**聖諱**となりました。聖諱とは聖人に対する諱です。孔子の諱「孔丘」の「丘」を避ける為には、全て右側にオオザトのついた「邱」を用います。中国では邱姓の人が沢山居ますが、皆元々は丘の字でした。明末の詩人・高青邱の元々の号は青丘でした。それが清の時代では聖諱を非常に重視するようになっていたので、彼自身は既に亡くなっていたのに、後になって「邱」に変わったのです。

地名にも例があります。韓国に大邱（テグ）という市があります。大きな丘という意味の地名ですが、韓国は儒教を重視する国なので、孔子の聖諱を避け、「邱」になりました。

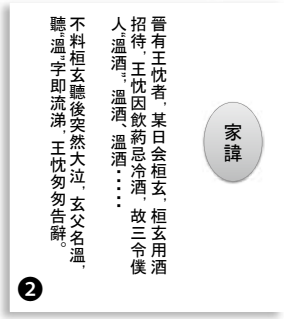
では、諱を犯したらどうなるでしょうか。中国は非常に歴史が長い国です。統治者達は、国を管理するには思想管理、いわゆるイデオロギーの統括が第一と考え、国民に緊張感を持たせようとしまし

た。ですから、それぞれの時代、国諱に対してはとても厳しい姿勢で臨みました。諱を犯したら大変な事になります。唐の法律では、上奏・奏辞の書類の中で国諱の一字を犯した場合、「杖刑八十」（背中と太股を八十回棒で打つ）が科せられることになっていました。あまりの苦痛に、その場で亡くなってしまう場合もあったようです。上奏中に誤って言ってしまった場合は「笞刑三十」（ムチで三十回打つ）です。もしも、名前の二文字か三文字を全て書いてしまった場合、これも大変、「徒三年」（三年間の労役）が科されます。「嫌名」（同音字）の場合は大丈夫です。言葉というものは口から出したと同時に消えてしまうので、証拠は残りません。しかし、文字に書いてしまうと大きな罪になるのです。

「文字獄」と言う言葉を聞いたことがあるでしょうか。誤って詩文の中で国諱を犯してしまった文人が投獄、処刑される事もよくありました。一つ例を紹介しましょう。十八世紀頃の詩人・徐駿の夏の詩です❶。一見、何の問題もない詩に思えます。確かに、この詩句は、唐・宋・明の時代においては何の問題もありません。しかし、清の時代では、話は別です。徐駿は、最終的に処刑されてしまいました。一体なぜなのか。明王朝が北の女真族に滅ぼされ、その女真族が建国したのが清王朝です。詩の中にある「清風不識字」という一文。ここに出てくる「清」の字が、清王朝を意味するとみなされてしまったのです。「文字が読めないのに、何故か本を捲る」と。実は女真族には別の文字があり、漢字は読めません。清は、戦争によって明に取って代わり、それまで漢民族が統治していた中元地方を治める事になりました。つまりは馬上で天下を取ったわけです。しかし、それでは、長い歴史を持つ漢民族を統治するのは大変なのです。ゆえに、統治者の出身などを貶すような言葉使いに対しては非常に厳しいのです。文字獄が生まれたのは、このような背景があったからなのです。



❶

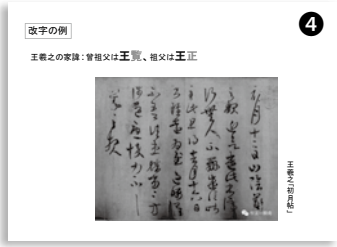


❷

家諱を犯した場合はどのようになるのでしょう。友人同士でも、相手の家諱を知らずに話してしまうと怒られる事があります。例えば、こんな話があります❷。晋の時代、王忱という人が、ある日、桓玄という人を訪ねました。桓玄はお酒を出して王忱をもてなしましたが、その頃、王忱は薬を飲んでいたので、冷たいお酒が飲めなかったのです。そこで、召使に「温酒、温酒、温酒」と三回念を押しました。すると桓玄が急に泣き出しました。王忱が訳を尋ねると、桓玄は、「あなたが突然私の父の名を何度も言ったからです。父の名は桓温、だからついつい父を思い出して泣いてしまったのです」。王忱はがっかりして帰りました。これは有名な友人同士の家諱の例です。ですから、孔子は、「この城門に入る前にはこの国（地域）の国諱を聞く。その人の家に入る前にはその家諱を知るべき。」と言い残しました。

❸

次は書の古典に見る、各時代の避諱の特徴について話したいと思います。東晋・王羲之の時代、更に唐・宋・清の時代を取り上げていきます。書作品の中で避諱する方法として多く見られるのは、主に三つあります。その三つとは、**改字、空字、欠画**です。



❹

❺

改字とは、同義の文字、または同音の文字に置き替える方法です。例えば、「正月」という単語は、元々は「政」だったのです。春秋・秦国の時代、毎年旧暦の一月になると、地方から官僚達が都に集まり、一年の行政が始まります。そのため、一月の事を「政月」といいます。後の始皇帝が紀元前二五九年二月十八日生れでちょうど旧暦の一月なので、「嬴政」と名付けられました。そこで、「政月」を「正月」と改称しました❸。

王羲之の作品には家諱のために改字された例がいくつかあります。王羲之の曾祖父の名は王覧、祖父の名は王正といいます。東晋の尺牘の特徴として、開頭には日付を書くことがほとんどです。例えば、『十七帖』などがそうです。王羲之が正月に手紙を書く時は、正月と書かずに「初月」としました。有名な『初月帖』の由来です❹。また、蘭亭序の中の二つの「攬」の字（毎攬、之攬）は、本来は「見る」という意味の「覧」の字ですが、曾祖父王覧の諱の為に改字したのです❺。「攬」は別の動詞＝引っぱるという意味です。歴代の書家達が蘭亭序を臨書する時は忠実に臨書しますが、創作する時は攬の字

をそのまま使わないように注意しているのです。

次は空字についてです。観音菩薩の名称は、元々は観世音菩薩ですが、「世」の字が唐の太宗李世民の「世」の字と関わっているため、この字を取ってしまいました。禅宗墨蹟の中にはよく見られます。

それから欠画についてです。一画か二画、或いは一部分足りないようにする方法です。これは一番多く使われる方法です。例えば、唐の高祖皇帝・李淵の「淵」の字。欧陽詢の『行書千字文』の中の「淵」の字は、右の部分が欠画になっています❻。それから同時代の褚遂良の『千字文』の中の「淵」はサンズイが欠画です。また、中唐の懐素の『千字文』の中の「淵」は最後の一画が欠画です❼。しかし、千字文といえば、最も代表的な智永の『真草千字文』では、「淵」の字は欠画となっていません。なぜでしょうか。それは時代が違うのです。

智永の生まれた年代などについての詳細は不明ですが、一応、陳～隋代・六世紀中葉の人物、唐の李淵・李世民という皇帝の前に居た人です。ですから、彼が書いた千字文の中では、「淵」の字に注意しなくてもよいのです。それから初唐の陸東之の『文賦』。彼の場合は、「淵」の字はサンズイしかなく、右側は完全に書かれていません❽。これも欠画の例ですが、ほぼ空字に近いです。陸東之は虞世南の甥で七世紀初頭の人です。世南に書を習っていたといわれ、代表作は『文賦』です。私も、初めて書を習った時にとても好きになった作品です。

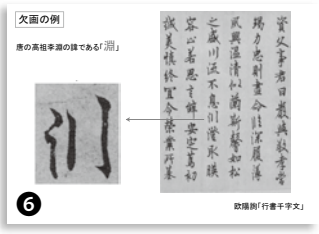
それからいよいよ唐の太宗・李世民の諱についてです。ただ、李世民の場合、「世」「民」この二文字は使用率の非常に高い文字です。ですので、これを避ける為に他の文字に替えたり、欠画にしたりするのは、大変な事になってしまいます。李世民はこれに気付いて、避諱を免ずる詔を下しました。その内容は、「二文字を一緒に書いてはいけないが、片方だけならよい（**二名不偏諱**）」というものです❾。これは李世民が作った例ではなく、遡ると、実は孔子の『礼記』の中にあるのです。孔子は避諱に関して様々な事を書きましたが、その中の「二名不偏諱」の文のおかげで、時には注意しなくてもよくなったのです。とはいえ、唐代書作品の中では、「世」「民」この二文字は、単独で出る時も欠画したりすることがあります❿。例えば、褚遂良の『千字文』の中の「世」の字は欠画です。褚遂良という人物は太宗の側近であり、太宗に深く信頼されていました。皇室に対する思いが非常に強かったのです。後に武則天が女皇になることに強硬に反対し、死刑に処されかけましたが、太宗の遺詔により、死刑は免ぜられました。それだけ、太宗への忠誠心は人一倍だったということです。

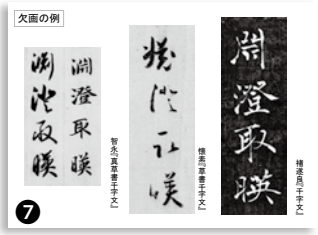
また、柳公権の『大唐回元観鐘楼銘』、顔真卿の『顔氏家廟碑』の中の「世」も一画足りない欠画です。

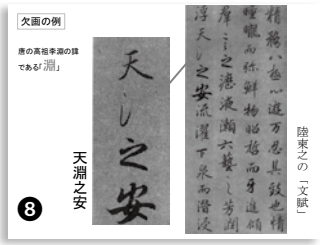
それから、「世」の字が出てくる時に「云」に改字する例があります⓫。宋の『遊宦紀聞』には、「太宗諱世民、故に今、牒・葉・棄皆世を去（のぞ）き云に従い」と記載されています。確認してみると、初唐の薛稷の『信行禅師碑』の中の「葉」、欧陽通の『道因法師碑』の中の「牒」は、「世」の部分が確かに「云」に替わっています。「葉」のこの書き方が宋代にも影響を与えました。蘇軾も「葉」の字をこのように書いている部分があります。

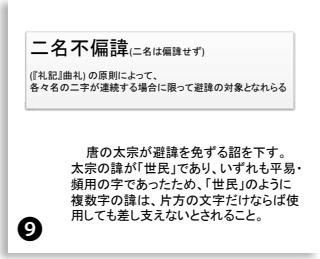
次は「民」を見てみましょう。褚遂良の『千字文』の中の「民」が欠画です⓬。また、『雁塔聖教序』の中の「民」は「人」の字に変わっています⓭。同義の字に替えるのも改字の一つの方法です。同じ文章なのに、『集字聖教序』では「世民仰徳」、褚遂良は「世人仰徳」と書いています。

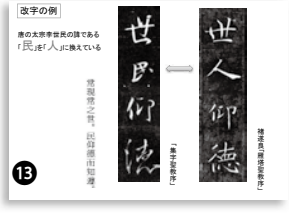
本当は、これはよくないことです。この文章は褚のものではないし、『集字聖教序』を作った懐仁のでもなく、太宗が掲げた文章なので、本来は替えてはいけないのです。





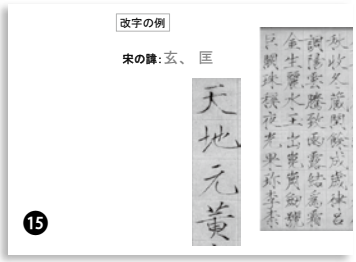


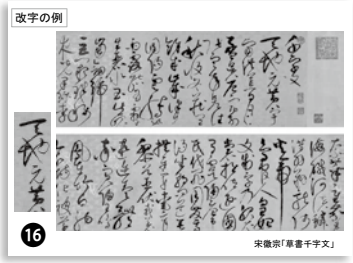




しかし、これらの場合は、諱を避ける為に字を替えたのであり、また、それほど意味は変わっていませんので、元は「民」の字だったのが、「人」の字に替わるのです。臨書する時は何も問題ありませんが、ただ、同じ文章を『集字聖教序』と比べると、「民」の字が違うな、となるわけです。つまり、改字なのです。ここで一つ、疑問が生じます。なぜ『雁塔聖教序』では「世民」を改字したのに、『集字聖教序』の「世民」は避諱しなくてもよいのでしょうか？よく見ますと、『集字聖教序』の「世民」も欠画があります。また、もう一つ面白いのは、丁度ここは文章の切れ目で、「世」は前句の最後、「民」は次句の頭です。ですから、二文字一緒に使ってはいけないというルールには当たらないという解釈にも通用します⓮。

時代が下り、宋の時代に入ります。宋の時代、作品の中によく見られる国諱はおおよそ二つです。一つは「玄」、もう一つは「匡」の字です。聖祖の名は趙玄朗です。それから太祖の名は趙匡胤です。よって、「玄」と「匡」の二文字が諱です。宋徽宗も皇帝ですが、やはり自身の作品中でも避諱に注意しています。彼の『楷書千字文』、『草書千字文』の開頭では、「天地玄黄」の「玄」を同音の「元」に替えています⓯⓰。『千字文』は完成当初から非常に珍重され、各時代の啓蒙書として使われているので、文字を替えるのは、良くないのですが、止むを得ず、ここは「元」に替えました。このような改字は、臨書時はよいのですが、千字文の書を書く時は、「徽宗がこう書いたから私も…」は避けた方がよいでしょう。

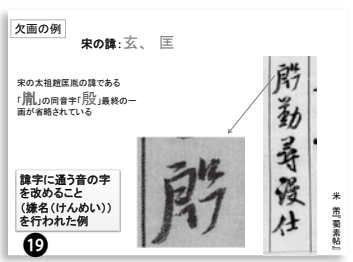




それからさきほどお話しした智永の『真草千字文』ですが、真蹟は現在、日本に一つあるのみです。「国宝小川本」といいます。刻本の最善本は「関中本」です。私としては、小川本より関中本の方が好きです。素朴で穏やかで温かみを感じます。しかし、両帖を照らし合わせてみると、関中本の「玄」「匡」とも欠画となっています⓱⓲。真跡は欠画がないのに、なぜ関中本はこのようになったのでしょうか。私が学生に臨書させる時は、点をうつように言います。というのも、関中本は十二世紀に作られた拓本で、おそらく真蹟に基づいて作られたものと思われますが、ここにはまた、皇帝の諱が関わってくるので、拓本を作る時も忠実には作れないのです。拓本も時代によって避諱しなくてはいけないという事です。

次は宋の米芾の『蜀素帖』の「殷」の字を見ます。殷は二回出てきます。初めは四行目、それから文尾にまた出てきますが、後者は欠画です。右のはらいがありません⓳。宋の太祖皇帝・趙匡胤の「胤」と「殷」は同じ発音です。これは嫌名という例です。本来、嫌名は諱を注意しなくてもよいのですが、米芾という人物も皇室に深く関わっていた人です。彼の母が英宗皇后の乳母として仕えた恩陰で、彼は科挙によらず高い官位に就きました。彼は自由奔放でわがままな性格であったため、恐らく、この作も、最初は何も思わずに書いたのでしょう⓴。しかし、後の方は、少しでも忠誠心が顕れるようにしようと、一画足りないように表現したのだと思われます。これは嫌名（名と同じ発音の字を使う）避諱の例です。

次は清代にいきましょう。清代典型的な国諱は「玄」「弘」「寧」です。これは三人の皇帝に関わっていて、康熙帝「玄華」の「玄」、乾隆帝「弘暦」の「弘」、道光帝「旻寧」の「寧」。まず、「玄」についてです。楊沂孫の篆書は最後の点が欠画、それから呉譲之、何紹基、趙之謙、楊守敬などの隷書も、皆、欠画です㉑。ですので、字書にある避諱した文字を我々が創作に取り入れる事がありますが、この経緯を知っておいた方がよいと思います。それから清の姚孟起の『九成宮醴泉銘』の臨書ですが、本来臨書ですから、そのまま写せばよいのに、「玄」の字も欠画にしているのです㉒。次に「弘」についてですが、これも最後の点が無く、きちんと欠画になっています㉓。最後に「寧」について。この字は扁平に造形したいのならば、

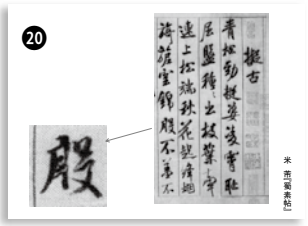


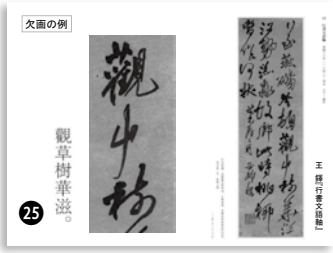
これでよいと思いますが、何紹基や呉大澂などの作では、最後の一画がありません㉔。漢碑にはきちんとありますが、こちらには無い。やはり旻寧の諱を避ける為にこのように書いたのです。

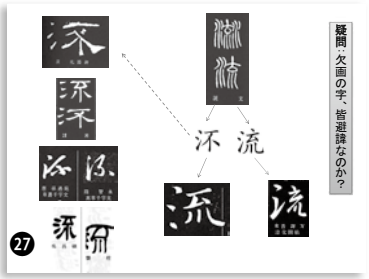
　清代書家の家諱もありますが、今後の課題にしておきたいと思います。私は三年前のある書道展の図録の中で王鐸の『行書文語軸』に何か不思議な余白・おかしい部分があるのを目の当たりにしました㉕。釈文の「觀艸樹…」の艸の字が半分抜けています。もしかすると、王鐸の避諱に関係があり、欠画なのではないか…。そう思い、『王鐸字典』を調べてみると、艸の字はきちんと左右とも書いてあります。では何故この作品の艸は半分なのか。これはおそらく誰かの為に書いたものなのだと思います。先ほど、風岡先生の為書きのお話がありましたが、恐らく、王鐸の場合も、相手の方の家諱と関係があると思うのです。「私は、この詩がとても好きですが、艸の字は我が家の家諱として書いてはいけないので欠画して下さい…」という依頼であったのではないかと思います。

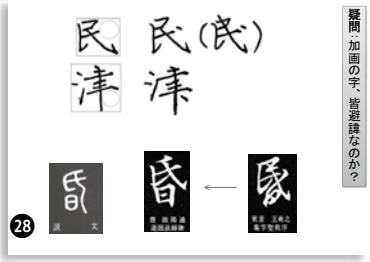
　それから避諱に関わる古典の字に対して、書作品に使えるかどうかという事についてお話しします。臨書の場合は、例えば、『蘭亭序』の「攬」、『雁塔聖教序』の「人」のような改字された字はそのままでよいのです。ただ、欠画された字は、例えば、『関中本千字文』の「玄」のような場合、臨書する時はきちんと点を入れるべきだと思います。忠実に臨書した方がよいといっても、やはりわざとこのように不完全に書いたのに、なぜ後の人がそう書かねばならないのか？また、先ほど挙げた「寧」の字も、「最終画の無い、この造形がいいな」と思って書いても、解る人に見られたら笑われてしまいます。「書いたあなたは清王朝の遺臣ですか？違う？それなのになぜ諱として注意するのですか？」これでは、少し勉強不足だと思われてしまいます。ですから、創作は気を付けた方がよいと思います。

　また、一つ気になることを皆さんと考えてみたいと思います。ある全国高校書道展に関してホームページに載ったのがこの作品です。鍾繇の『薦季直表』㉖」。有名な作品ですが、この高校生は臨書する時に「民」の字の欠けたところをきちんと補って書きました。しかし、この作品は駄目だと、審査員がコメントを出したのです（ユーチューブで見ることができます）。その理由は、鍾繇の『薦季直表』は元々「民」の字が一本足りないので、忠実に書くべきだ—ということでした。この作品は、賞の候補に入ったものでしたが、最終的には駄目でした。何故このようなことが起こるのか。鍾繇は一五一～二三〇年の人で、王羲之よりも少し前、李世民よりももっと古い時代の人です。ですから、「民」の字を欠画にする必要は全く無いのです。それなら何故欠画になっているのか？それは、唐の初めに拓本を作ったからなのです。これは、『関中本千字文』の場合と同じ問題です。中田勇次郎先生は、「『書道全集』の中にも、この字は初唐に拓本が作られて欠画したとある。だから、学生が臨書する時、指導する先生もこの事を解って、民の欠画を入れるように指導した方がよい。」とされました。しかし、この書道展では駄目とされてしまった。可哀想ですね。審査員の方の考えも一理あるとは思いますが、皆さんはどう思われますか？私だったら、五分五分というところでしょうか。忠実になり過ぎると愚忠になるという考え方もありますね。特に原作がそうでないない場合は。審査員の方に訊いてみたいのです。「あなたは李世民の遺臣ですか？そうでないなら、学生がきちんと「民」の字を入れたのに、









なぜこの作品が駄目になってしまうのかな…。」私は少し、審査員の方の考えには同感できません。

蛇足ですが、私が最初に蘭亭序を臨書した時、「流」の右側の点がなぜ無いのか不思議で、先生に尋ねたら、恐らく避諱の問題だろうと言われました。そこで、もしかすると、王羲之の家諱に「流」の字があるのかなとずっと思っていましたが、調べてみると、そうではありませんでした。なんと、漢の時代から点のない「流」の字がずっと存在したのです㉗。篆書の「流」は左右に水があり、真ん中は子供が逆さまの形をしています。昔、中国では子供の間引きの方法として、川で溺死させたのです。誰かに拾われたら命が助かり、そうでなければ死んでしまう…。後に、サンズイに充（トツ）と書いて「流」となりました。しかし、漢隷の「流」には、サンズイに不と書く「汙」の字形も多く見られます。例えば、『礼器碑』『隷辨』の「汙」。さらに、『康熙字典』には、この「汙」は単独字形として存在し、「流」の古字と説明されています。こうして見ると、「流」の字は漢代から「流」と「汙」の二つのパターンに分かれていました。王羲之、孫過庭、智永らは、「汙」の書き方をしてきたと思われます。また、清の呉昌碩などの隷書にも「流」より「汙」の造形をしているのです。減らしたり増やしたりする事が、避諱と関わっていない場合もあるのです。それから、「昏」という字は「昏」の上部「民」の改字という説がありますが、『説文解字』には既に「昏」の篆書があるので、避諱の改字ではないと分かります㉘。

ことが見て取れます。ゆえに、私の考えとしては、点のない「流」の字は、書き易いように点を打たないのではなく、もともと点のない「汙」の字形を書いていると提唱したいのです。もう一つ、「民」「氏」の最後の右上に点を打つ場合、これも、私は先生から、最初は唐代の避諱・李世民の諱を避ける為に加画したのだと言われました。しかし、後で調べてみたら、点を加える事は漢隷の中にもあったのです。バランスを取った点、つまり、余白が空いて何か最後に一つあった方がバランスがよいので、点を打ったということです。ですから、「津」や「神」のように、余白を埋めて書き易くする為に点を打った、ということはよくあるのです。

時間になりました。皆さん、古典の臨書の中に、中国の避諱という文化が、多かれ少なかれ、関わっていることがお分かりいただけたでしょうか。これは古典などを勉強する時にも関わってくるものです。少しでも避諱に対して興味を持っていただけたなら嬉しいです。

揮毫風景

▲劉作勝先生講演

▶風岡五城先生講演

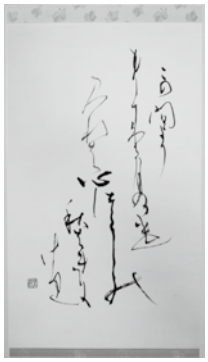
▲交歓会

▶木村大澤先生挨拶

▲講演に聴き入る参加者

第23回東書藝選抜小品展

令和元年九月二十四日～二十九日、栄サンシティーギャラリーに於いて開催。選抜メンバーは六十六回展で高評価を受けた院人三十名。実力者揃いで、さすがの力作が並んだ。本展の八尺作品から小品へと、規格が違う制約の中でどう魅力的な世界を表現するかがセンスの見せ所だ。紙面が限られるが、印象深かった作品を紹介します。

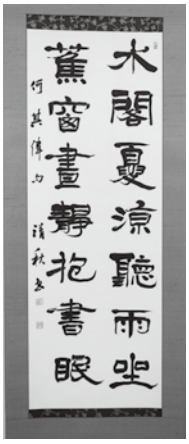

大西紫蓉

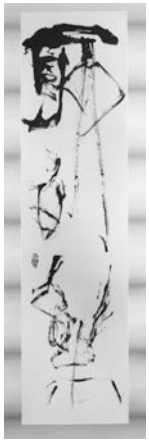
井分潭風

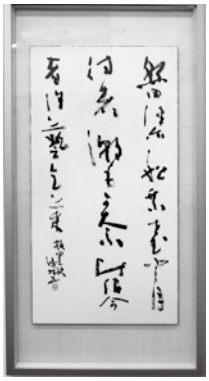
吉戸清華

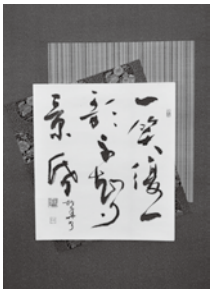
鳥居玉香

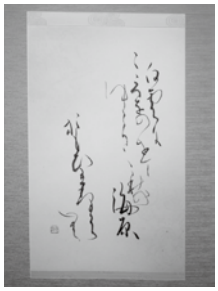
伊藤緑穂


内海清秋


長谷川雅江

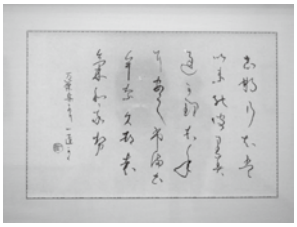

石黒鴻羽


飯田松華


松田真香

伊藤芳桜

大場映翠


竹内一逕

出品者

飯田	松華	城田	桑軒
石黒	鴻羽	竹内	一逕
伊藤	芳桜	棚橋	藍水
伊藤	緑穂	冨板	竹華
井分	潭風	鳥居	玉香
内海	清秋	名古路	雅翠
大西	紫蓉	布目	京陶
大場	映翠	信藤	緑華
梶	蘇山	長谷川	雅江
北原	竹堂	畑中	花影
浜島	渓園		
廣江	蘭秀		
藤枝	静香		
松田	真香		
三浦	希韶		
三田	敬華		
八木	一華		
山下	桐軒		
吉川	聲泉		
吉戸	清華		

第45回記念 宏道書展

今年も夏祭りで賑わう名古屋・伏見の電気文化会館で開催された第45回記念宏道書展。作品は一般部・学生部とも練度高く、令和の好企画もあって会場は大いに盛況だった。

第45回展を終えて

会長　山本晴城

宏道書展も今年で四十五回展を迎え、出品点数は一九六点。漢字は素より、かな・漢字かな交じり・硬筆（ペン）作品とあらゆるジャンルの出品作品総てが、令和元年五月の改元を記念し題材を万葉集に求めて発表した。漢字の作品では、同じ文字・画数の少ない文字等多くなり、作者皆苦労した様子であった。しかし今回テーマを「万葉集を書く!!」とした事で、改めて万葉集を見つめ直す良いきっかけとなったと思う。またこちらも令和元年を記念し、展覧会場で「令和へのメッセージ」と題して、一般・学生、見学者の皆様に思い思いのメッセージを付箋に書いていただき、台紙に貼り付けて「令和」の文字を完成させた。これからも宏道書会は、五十回・六十回に向け先代山本宏城、風岡五城名誉会長の理念に基づき益々精進して行きたいと思う。

猛暑の中をご来場いただきました皆様には、心より厚く御礼申し上げます。

第二十回 心書会展

安藤清舟先生代表・心書会主催の第二十回記念展が、令和元年十月四日～六日、亀山市文化会館中央コミュニティーセンターにて開催された。安藤代表は本会副会長としての活躍は勿論、今年も瑞雲書道会でロシア・ウラジオストック、三重県書道芸術家連盟で台湾を訪問されるなど気力の充実も十分なご様子。今回の記念展では三十九名の会員と代表の作品・計五十二点と、よく指導された学生の条幅・半紙作品を披露。それぞれに習熟度高く、見応えがあった。特に安藤代表のエネルギッシュで若々しい線条の作品には目を洗われる思い。また特別展示として、先生所蔵の亡き豆子甲水之先生作品十点も飾られたが、これを集めて展示するには大いにご苦労があったとのこと。そして来年一月に開催予定である、豆子先生の遺墨展準備にも奔走中ということだった。

心書会の益々の発展を祈念致します。

瑞雲 曽田理事長・桜井亀山市長ご夫妻と

書展訪問

第53回碩山書院一門展

碩山書院（代表・大竹翠葉本会常任理事）が八月三十一日・九月一日、蒲郡市民会館東ホールで一門展を開催。半世紀の歴史を持つ同会は東書藝の実力者も多く、代表はじめ幹部は三点、四点と意欲的な出展。九十余点の作品群は広い会場にも全く負けていない。更に一一二名の小中学生部は鉛筆・ボールペン・デスクペン・額・軸等幅広く指導され、若い芽の育成に力を入れた活動も頼もしかった。

第39回 飯田書人会展

加山幽石・本会参事代表の飯田書人会が九月十九日～二十四日、飯田創造館にて第39回展を開催した。

特別展示として、師豆子甲水之先生を偲ぶ書展を併催。飯田書人会発足以来、三十八年間指導され昨年逝去された先生の作品や折り帖などが展示されて、あらためてその偉大さを知る。幸運にも加山代表の解説を伺いながら鑑賞することが出来、強く心に残る一日となった。計三十四点の会員作品もお一人二点の出品で思いの込もった力作が並んでいた。

ににん展

渡辺清香・本会常任理事と玄玄書作院・村上春汀先生の「ににん展」が、十月二十九日～十一月三日まで名古屋伏見のギャラリー名芳洞で開催された。会場は真っ白な壁面に大小額作品がゆったりと飾られ、現代的な雰囲気だ。村上先生は主に一字・二字のシンプルな題材で黒白のコントラストが印象的。渡辺先生の書体・技法・墨色に工夫を凝らしたその世界は、恩師であった故・澤井瘦蛙子先生を彷彿とさせる。近頃は甲骨・金文の研究に力を注ぎ、大きな作品の形で表現してみたいとのお話。おはこのポエム作品は変わらずに魅力的で、益々のご活躍が楽しみだ。

第11回 尚友書展

十一月五日～十日、栄サンシティーギャラリーにて開催。荒川青曠・本会常任理事を代表に、磯部麗光、川口陽香、杉野原光華、背尾玉燁、松成栄翠、山下一笑各氏のメンバーで、計二十五点の軸、額作品を展示。荒川代表は、「全員が高い品格を求めて、それぞれのテーマに真面目に全力で取り組んだ結晶。これからも日々着実に歩みを進めていきます。」と、二年に一度の展覧を振り返られた。

第36回花墨会展

十一月十六・十七日、三重郡菰野町図書館展示室にて本会常任理事・松岡麗泉先生主宰の第三十六回花墨会展が開催された。会員四十名、学生六十名の二点ずつ計二百点を展示。五歳～八十九歳までの出品で、三世代で熱心に鑑賞する姿が見られた。先生は展覧会準備を終え訪台、帰国後すぐにこの主宰の責を元気に果たしておられるとの事。会場は明治・昭和の偉人の四作も加わって雰囲気に厚みがある。「一般・学生とも継続が中々難しいが、今日の作品は一年間努力を積み重ねてきた集大成」とお話しされた先生は、晴れやかなお顔だった。

「豆子甲水之遺墨展」のお報せ

令和二年一月七日（火）～十二日（日）、名古屋伏見・電気文化会館5階東ギャラリーにて、東書藝名誉会長であられた故・豆子甲水之先生の遺墨展が、新道書道会・東書藝主催で行われる運びとなっている。先の飯田書人会展、心書会展で何点か展示されたが、この遺墨展では計三十三点が集められる予定。書道界に偉大な足跡を残された先生が九十五歳で旅立たれて早や一年余となるが、一度にこれだけの遺作を観られるのは二度とない機会かも知れない。同時開催の東書藝代表作家展共々、皆様是非、足をお運びください。

今後の予定

◇第55回新春東書藝代表作家展
会期　2年1月7日㈫～12日㈰
会場　電気文化会館5F東西ギャラリー
主催　東海書道藝術院（代表作家展・遺墨展）
　　新道書道会（遺墨展）

◇豆子甲水之遺墨展
会期　2年1月7日㈫～12日㈰
会場　電気文化会館5F東西ギャラリー
主催　東海書道藝術院（代表作家展・遺墨展）
　　新道書道会（遺墨展）

◇'20今日の書展
会期　2年1月21日㈫～26日㈰
会場　愛知県美術館ギャラリー
主催　中部圏書芸作家協議会
　　中日新聞社
　　祝賀会
日時　2年1月20日㈪
会場　メルパルク名古屋

◇第35回記念景雲社「絆」書道展
会期　2年2月10日㈪～16日㈰
会場　クリエート浜松3階ギャラリー31
主催　景雲社（勝田晃拓）

◇第10回有鄰書展
会期　2年3月11日㈬～15日㈰
会場　岡崎市美術館
主催　有鄰会（安藤餘香）

◇第11回幽石書道会展
会期　2年3月12日㈭～17日㈫
会場　飯田創造館
主催　幽石書道会（加山幽石）

◇東書藝院人研修会
日時　2年3月22日㈰
会場　東桜会館

◇第67回公募東海書道藝術院展
第1会期
　2年4月7日㈫～12日㈰
会場　名古屋市民ギャラリー7・8階
第2会期
　2年4月21日㈫～26㈰
会場　愛知県美術館ギャラリー
開場式2年4月21日㈫
　午前10時より
授賞式・祝賀会
　2年4月21日㈫
会場　名鉄ニューグランドホテル
主催　東海書道藝術院
　　中日新聞社

編集後記

◇研修会にて講演して下さった劉作勝先生、風岡五城会長に厚く御礼を申し上げます。

◇東書藝66歳は壮年期。創立の精神を繋ぎ、来年も大いに奮起して活動していきましょう。皆様、どうぞ良い新年を。

令和元年十二月　第一三九号
発行　東海書道藝術院
編集　加藤松亭
　　堀江龍舟